人と人との絆を結んで、いっしょに人生をつくっていこうよ…

――競争社会の競争相手ではなくて共生・協同の人間社会・人間関係を結ぶ友として生きる

柳澤　明朗（労働旬報社社長）

◇今崎ルポの目線とその土台

彼は早大仏文卒業後、労働組合運動に出会い、２年たって労働法の専門の知識を身につけて運動に参加したい、「共生・協同の社会を」と思うようになったからといって、大学院の法学研究科労働法専攻に入ってきた。

当時の労働法ゼミは野村平爾教授、沼田稲次郎都立大教授、松岡三郎明大教授という労働法学会の3巨頭が教授陣、助教授、講師などの野村教室の先輩がキラ星の如く並ぶゼミの1学年下に入学してきた。これが以後50余年、人生をともに創っていく友、著者と編集者として歩むスタートだった。

なぜ、こんなことを書くかというワケを一言。彼が文学だけでなく労働法を専攻したことと今崎ルポの方法論とか、ルポを構成していく事実・現象を捉えていく視点、実際に起きた事件・現象の正体や問題点の把握、双方の正当性・口実を論じる形での記録づくりの手法を駆使する今崎作品の方法などに深い関係があると思うからだ。

野村ゼミは『旬刊・労働法律旬報』別冊に毎号数本掲載される「労働判例」がテキスト。

『回想の川崎忠文』への追悼文

そこには、私たちが、まだその実際を経験したことのない、労働組合や労働者の権利の実際・運動・法的問題点が満載されている。また目が覚めてしまうばかりの「人間らしく生き、働く権利」が凝縮・集約された条約や国際労働運動の成果・判例も読み学習していく。国際常識の権利の到達点と日本の労使関係、権利のすさま

じいズレなどがみごとにわかったりする。

沼田先生の最初の授業の時のこと。「君たちは自治会活動や平和運動などの学生運動に経験があるのだと思うし、労働法のゼミを選択してくれたが、このゼミは戦前の旧憲法時代には無かったのだ。戦前がなぜ、どんな体制・土台かを解明する文献一覧を書くから読んでくるように……これらの文献は、新憲法体制であったからこそ存在したゼミの意味をとらえるためにも不可欠だ……」と宿題を提起。大きな黒板いっぱいの文献を書き上げていく後姿に身がしまる想いがした。今思うと、他学部から来た今崎君歓迎のメッセージもこめられた授業だったのかと思ったりする。

こうして今崎作品のメインテーマ「人間らしく生き働く」典型的な権利やその事例などの国際労働運動の成果や条約も学び、身につけていくなかで、作家として自信をもって現場取材をする前提・視点がつくられていったのだと思うのだ。

◇〝自由〟がある家庭での育ち――今崎ルポの土台のひとつ

今崎ルポのもう一つの要素に、夫妻の家族・家庭の要素があると思えてならない。

鰺坂真・上田浩・宮田哲夫・村瀬裕也編著『日本における唯物論の開拓者――永田廣志の生涯と業績』（２００８年８月30日、学習の友社）の永田先生の一人娘が今崎夫人の

則子さん。本書に「父・永田廣志の思い出」で「治安維持法下で」、「戦中の暮らし」などを書いている。今崎君は、企画や原稿の良し悪しを夫人に語り判断してきた癖がある。私に企画を持ち込むときに「則子が企画も原稿もいいといってるからな」と及第点を受けていることを根拠にして、私に原稿を読むことを頼むのがしばしばだった。

今崎君のおかあさんの静枝さんは作品集も出している作家。日本の第2回メーデーに初めて5人の女性が参加したときの一人だと、彼は誇らしげによく語っていた。

お父さんの義則さんは日本の金鉱山での珪肺症の研究・開拓をしていった医師で、金鉱山の労働者の集団検診のシステムをつくり取り組んでいった方。この山陰の民医連・出雲市民病院の院長だった父上が、１９６０年3月に過疎化日本一の島根県の三瓶町志学に「三瓶診療所」を設立し地域医療にとりくんできていたが、高齢と病気がちの父上の後継を決意した長男の正生先生が、長年の高校教師を退職し、39歳で東邦医科大を受験して合格、夫人・子どもの3人で上京して医学部を卒業した正生先生が診療所を引き継いでいき、今日になっている。今崎君が、日本の近代のなかで、デモクラシーや個の権利など、両家とも、〝自由があった家だったんだよな……〟と語っていた。

正生先生が県の教員組合で役員をされているときに、さまざまな指導をうけながら今崎家に長期に滞在させて貰って、勤評闘争の実態・意識調査をさせていただいた。後に

群馬県の都市でも、大学院の民法専攻で今は「９条の会」などで一緒の、今崎君の長年の友人の古屋孝夫君も参加して、群馬の私の家に３人で合宿して調査に取り組んでいった。

勤評闘争が最後までもりあがっていた闘争の共闘団体、群馬民擁連の金子満広副代表に、意識調査の対象分会を紹介していただいて調査ができたのだが、これが「上野の森に『広島・長崎の火』を永遠に灯す会」や今崎作品『人生つねに始発駅　人間金子満広』の元衆議院議員の金子先生との最初の出会いでなかったかと思っている。

◇すべての作品を貫く人間讃歌――共生の社会・人間関係を紡ぎだすルポ

『競争と共生』……内橋克人さんの提起。

「競争の原理は分断です。分断して対立させ、競争させる。……共生は連帯と参加と協同を原理として食料、エネルギー、介護など人間の基本的な生存権を大事にする。ＦとＥとＣを自給し、消費するだけでなくそこに雇用をつくり出す。その価値観の下で新たな基幹産業を創出し持続可能な社会に変える」――市場万能、競争至上の新自由主義経済に異議を唱え、「企業破壊、社会の絆が断たれる」と警告する内橋論（『朝日新聞』ＯＰＩＮＩＯＮ　資本主義社会はどこへ。２００９年２月23日）。

この指摘の時に今崎君が以前、著書で書いていたことを思い起こす。「高橋ちば市民生協理事長が『どぶ川学級』の著者・須長茂夫さんの〝子育て、人づくり〟の一緒に育ち発達するという思想から、人と人をつなぎ、結ぶ〝ごいっしょに〟という、生活協同の新しい理念、用語ををひきだした事実は、大変示唆にとんでいます。すなわち、人間の成長そのもの、人間そのものを、生活協同の運動、事業のまん中にすえたということです……」(『生活　ごいっしょに』エピローグ。１９９０年3月15日刊。今崎著)。

指摘されるように、極限にまで組み立てられた分断・競争社会にストップをかけ、協同して生きる活動・社会づくりの活動のまっただなかに飛び込んで、今崎君自身が生協の配達車にも乗ったりして、生活の、女性の、子育ての、教育の、平和のとりくみの現場のただなかにとびこんでいってとりくむなかで、本書や作品群が創られていったのだと思う。

◇人間ドラマ・人間関係ルポ

１９６２年10月から4年間、大好評だったテレビ「判決」でシナリオ作家の一員として参加したのが彼のデビュー。しかし番組への政府・自民党などをはじめとした「偏向番組だ」の干渉が繰り返されて、１９６６年8月10日の番組を最後に放送は中止となっ

た。その後、『コブだらけの勝利』（１９６９年刊）でルポの最初の単行本を出版、以後35点の単行本（共著も含む）と70点以上のエッセーという業績を残して、昨年（２０１０年）12月に旅立っていった。

いま、「無縁社会」とか「絶縁社会」とかが語られる。これは人間の絆・共生にかえて、お互いが人間の尊厳で結ばれ響き合って絆を結ぶのではなく、友人もふくめて、他者を競争の相手としてのみにしてつくられていく企業社会・人間関係がうみ落とした産物だ。

これに対して今崎作品が貫くものはまったくちがって、家庭も地域も、仕事のなかでも描かれる人間讃歌。すべての作品で、「ご一緒に人生を創っていこう……」と呼びかけ、出会いを創り、絆を結び、共生が創りあげていく人間社会・人間関係が生みだすすばらしい営みを描く作品群だ。

激動・激変をしていく時代・社会で生じる人間疎外への人間回復の取り組みのルポ群であったり、日フィルなど文化、マスメディアからの作品、官公労中心から民間、とりわけ日本の企業社会に最大の特色である極少数の大企業のもとに何階層も重ねられたピラミッド型中小企業群社会、町工場、地域でのたたかいのなかで生まれてくる、人間らしい労働の回復、人生づくりの現場からのルポ群であった。

傷ついたモデルや不当な人間扱いを受けた労働者たちが、作家・作品との出会いをとおして、自分や友人たちの素晴らしさを発見し、希望・夢をもって歩み出す人間ドラマ・ルポ群だ。

◇取材魔の方法

作品づくりに関係することだが、彼の感性にひっかかったり、気がかりな情報に出会った場合、私を企画に巻き込むための説得にくる。「魅力があるんだな……この人物……」。彼独特の感覚で捉えた、相手の人間丸ごとの魅力を懸命に言い張り、おしてくる。そして企画書をまたもとぼけている。

「それでどうした……」。いつものように、なぜ、なにを描き、読者に届けたいんだと追求すると、取材魔の彼が録音した日フィル団員の２００時間のテープをあんたが聞いてめぼしい人物を決め、その取材をしながら決めようよ……とか、長崎造船の４３０人の取材とか……にまきこまれていく。

彼の目をつけた人物の家庭にもおしかけて取材していく仕掛け・ワナをかけてくることになるのだが、日フィル企画では、山本武司宅にまず連れて行かれた。家に入ると、天井の３カ所くらいにあるすごいスピーカーから音楽が流れ続ける。何回訪ねても同じ

だ。いわば、お客さんがきているのにな～と思い、「いつもそうなんですか」と聞くと……「これは私の空気ですから、子どもたちにとってもね……」という。父上もオーケストラの有名な演奏者とか。しゃくだけれど、帰りには「日フィル企画をしないようなら人間じゃねー」とゴーサインをだしてしまう。

そんな場面にとまどったり、楽員のよごれた小さな下宿にいくと、天井からバイオリンが紐でつるしてある。「天井につるして置くんですか」と聞くと、「置くところがないからね……」という。そして「あれ、いくらぐらいだと思いますか」とからかうようにいう。「いまなら4億円くらいはしますよ……」。3度の食事も満足にできないような状態の争議団の家にある宝物に驚くばかりだった。

◇作品の思い出……別掲の作品群の案内板

1　『日フィル』と、ともにあゆみながら。

今崎君の凄いところは、解散・解雇にさらされたオーケストラが、これまでの殿堂で「音楽を聴かせてやる」からぬけだして、市民とともに創りあげていく12年にわたる新しい音楽運動のなかで再建していくとりくみを、文字通り、全国を共に歩きながら……、『友よ！未来をうたえ』（正・続）、『新世界へ――日本フィルの旅立ち』3冊で刊行。映画

化もされ、世界に発信されていく。

そのときに今崎君の位置は、著者というよりは、日フィルと市民が生みだした新しい音楽運動の担い手そのものの一人として、全国に展開されていく各地の市民のコンサートづくりのとりくみにも率先して参加しながら、描いていく現場ルポということだ。

彼の作品の特徴は、このように、取材というよりは「俺たちは人間だ。人間扱いをせよ……」とたたかう一人ひとりの争議団員とともに生き、あるいは日本フィルの活動のど真ん中に参加しつつルポしていくことではないかと思う。こうして音楽家・音楽が描き出す人間讃歌・人間変革に感動の連続の作品がうまれてくるのだ。

２　『ドキュメント日本航空―国民の翼をめざして』・単行本。また、これに関連した取材、企画などを描いた『日航機事故の深部と労使問題―「ドキュメント日本航空」を書き終えて』（「賃金と社会保障」特集＝労務管理のあり方と事故など見事な記事・１９８３年）、日航問題の単行本と雑誌評論、日航機事故の深部と労使問題など、今日の日本航空問題をも解明する作品群などいいものあり。

３　東京争議団関係。技術革新が人間疎外に直結する労働の質も形も激変のなかでの

人間らしく働く状態のルポ群。重厚・長大から軽薄・短小、ＩＴ時代への出発のなかで、日本フィルや沖電気をはじめ争議団の「人間疎外の回復」「人間らしい労働を」を求めてたたかうルポ――沖電気『なにをみつめて翔ぶのか――沖電気指名解雇をこえて』、報知新聞・印刷のたたかいの連作各種がある。そこでは戦後の企業社会の変動・労働現場の変質・変化のもとでの人間が見事に描かれている作品群。

４　生協と一緒に３年連続したイタリア訪問など国際的な連携活動を通して、文化で、くらしのなかで――日本よりＧＮＰのはるかに低い国の見事な豊かなくらしの事実にふれ、「豊かさとはなにか」「文化とは」などを根底から問いかけ提起していく作品群。共生・協同の典型的先進国の事実をルポし続けている。

５　日本の生協もまた、すさまじいまでの発展、なぜか。くらしのなかで、地域のなかで、子育て・教育・平和の問題で絆結んで、「競争をこえた共生・協同」にとりくむ、各地の生協を中心に進められた単行本と評論。本も評論もすぐれたものが多数あり。

６　『いのちの讃歌』……２歳の時の脳性小児麻痺が原因で、左足指しか動かない重

度身障者の木村浩子さんが、座敷牢にとじこめられて育つなかで文字を憶え、短歌をつくり、足指で絵を描きつづけてきた彼女が、軽いがやはり障がいを持つご主人と結婚されて出産となってきたときの物語。障がい者の見方、発達論など人間の発達観・論をリードし、問いかけていく絶好の題材・問題提起の書でもあった。

「こんな重度身障者の出産は世界に例がない」……と出産がせまるなかで病院から受け入れられなかったときに、民医連・医療生協の福島病院が受け入れてくれて無事出産し、子育てに取り組むルポ。

担当の江森看護師からの連絡で今崎君ととんだ。その江森さんに今崎君の偲ぶ会の連絡をしたときに、「私は今崎先生が人間というものを捉えるときの人生の師でした。人間として、医療の仕事にいる私が患者と向き合うときの姿勢、かかわり方を浩子さんに向き合う今崎先生の姿から本当に学びました」と語ってくれた。

足指でようかんを切り、皿をふき、楊子をそえて、皿を押してくる浩子さんの歓待に、今崎君はまことになにもなかったように羊羹を食べていった。私はどうしても手が出なかった。浩子さんが大笑い。「社長さんは正直だね。いいんだよ……」といって、みんなで大笑いした。ひっくり返るほど恥じた。

作品とこの事実は、世界に先駆けて先進的に取り組まれていた日本の障がい者の発達

論――人間論の根底ともいえるところから、テレビ局はもとより各関係者・専門家集団がいっせいに研究会などをして、取り上げてくれた。

7　『明けない夜はない』の映画化……村山ひでさんの3冊シリーズの最初の出版。何人かの監督や作家の先生方から映画化の話がきたが、山形県教組が教組の企画で映画化を大会決定してくれた。山本薩夫監督・伊藤プロデューサーのゴールデンコンビで話が進む。シナリオを依頼された飲めない今崎君も、毎度参加してしゃべったり、山形県に取材したりして深めていった、実に楽しい時間をすごした。

第1稿があがり提出されたとき山本監督のＯＫがでない。結局、書いては直して7回書きなおしたときに、山本監督が他の映画をつくることになり映画化の夢は消えた。今崎シナリオの他に4本、計11本のシナリオがシナリオ作家から寄せられたが、監督のＯＫがでなかった。かなり激しく論議を重ねてはきたが、夫の逮捕投獄や結核で喀血したり、河原に建てた掘建て小屋で「水あがった」と泣く子どもと泣くひでさんが、なぜあんなに明るいのか、生まれつき、童女の様な……ではなくて、立体的に、映像で……というのが要求だった。

戦前の治安維持法体制や軍事大国のひどさも、怖さもくぐった監督たちの指摘はわか

りつつも、ひでさんの明るさと暗さの葛藤・変革が映像化できない苦闘のなかで、映画化の夢は消えた。才能と個性あふれる作家たち、表現者のすさまじいまでの葛藤をみた。

８　モデルのみなさんの人物伝・人生伝

『人生つねに始発駅　人間金子満広』（１９９０年）

『人生いつも素人―弁護士　尾崎陞の挑戦』（１９９２年）

『北の砦――ルポルタージュ　鳥生忠佑と北法律事務所』（２００９年）

（『今崎暁巳さんと私』刊行委員会、２０１１年６月４日発行）

●偲ぶ会実行委員長（元労働旬報社社長・早稲田大学大学院法学研究科労働法専攻で同窓）

人と人との絆を結んで、いっしょに人生をつくっていこうよ…

◇現代労働組合研究会のＨＰへ（ＴＯＰ）

 http://e-kyodo.sakura.ne.jp/roudou/111210roudou-index.htm